

—神奈川県湯河原町・真鶴町の環境変化と土地利用—

中 條 京 子

神奈川県西南端に位置する湯河原町は、古くから、温泉とみかん栽培で有名だった。また、隣りの真鶴町は、漁業に加えて、良質の輝石安山岩である小松石の産地として知られていた。

ところが、今日、湯河原町及び真鶴町の在来産業はあまりふるわない。一方、収入の安定するサラリーマンは日ごとに増え、町は、大都市郊外のような性格を見せるようになってきた。大都市との距離がかなりあれば、人々は無理をしてでも、在来産業をのぼす方向に努めたにちがいない。が、実際はそう遠くないので、かえって大都市への通勤者を増やす結果となってしまった。湯河原町、真鶴町の人口は、全体に増加しつつあるが、単にどの産業も一様にのびているわけではなく、実は、古くからの産業の不振のうえに、大都市通勤者のみが著しく増加していることがわかった。今や両町では、生産機能より、むしろ通勤住宅機能の方が主になりつつあるといえる。

湯河原町・真鶴町の土地利用及び地域構造の変化の直接的要因には、(1)東海道新幹線敷設の際に、トンネルの捨土を使って、湯河原駅付近を広く埋めたこと、(2)みかん生産過剰・価格低迷により、みかん農家の収入が著しく下がったこと、(3)

湯河原温泉の揚湯過剰により、温泉の水位及び泉温の低下や泉質の変化など、温泉観光業を脅かす現象があらわれたこと、(4)真鶴道路(新道)敷設により、自動車が真鶴半島を通過するようになったこと、などがあげられるとわかった。

湯河原町・真鶴町の地域構造は複雑である。両町は大部が山林であり、山林以外の部分はとても狭い。それなのに、各地域ごとに相互依存することもなく、別の産業が発展しており、景観は、場所によって全く異っている。このような、モザイク状の土地利用状況をつくらしめた理由の一つとして考えられるのは、まず、狭い範囲にいくつもの資源が分布していたことである。そして、それに加えて、町が地形的に入りこんでいるということも、大きく影響している。低地が、とても複雑な平面的広がりを見せているため、地区同士の連絡が少なく、あたかも別々の町であるかのように発展したのだと考えられる。

湯河原町・真鶴町の土地利用には、先に述べた4つの要因に加えて、人々の生活様式の変化、価値感の変化、時代の流れなど、さまざまな社会的経済的要因はもちろんのこと、気候や地形的制約など、自然条件も大きく関与しているといえよう。

関東における城下町の形態とその変遷

堤 佳 代

(1)目的と方法：現代の様々な都市問題を解決するには、都市空間における祖先の営みを明らかにする事も必要であると考え、本研究では、川越を対象地域として、城下町の成立、及びその変容を明らかにすると共に、川越の位置する関東における城下町の特性をも明らかにしようとして試みた。その際、我々人間の諸活動は地表面に投影されると

いう観点から、屋敷割や道路の形状、及び土地利用状況等の形態の考察に重点をおき、都市空間における歴史的空間的変遷の究明に努めた。そこで、まず、基本的文献調査を行った後、現地での観察・聴取、各時期ごとの復原図の作成、及び文献史料調査を行って、本研究を進めていった。

(2)本論文の構成：本論文は5章より成る。第1

章「序論」、第2章「城下町の系譜」、第3章「川越における近世城下町の事例研究」、第4章「城下町の近代以降」、第5章「まとめ」である。

(3)要約：(A)川越における変容；①川越では、中世末期から町場（市場）が発達していた。それは、町屋の屋敷割や、城下町プランが郭内専士型であった事からもうかがえる。また、その時期は、16世紀頃、後北条氏時代であろうと考える。

②近世城下町への再編成は、17世紀後半頃より行われた。この時、町割設定の基点となったのは、城内の富士見櫓で、軸線は、この櫓と氷川神社を結ぶ直線であると考えられる。また、この頃、鍛冶町では、町通りが形成されており、町屋も次第に充実していったと考える。

③当初、町の中心は、大手通りに面する本町にあったが、それが南町に移り、更に近代以降、20世紀に入ると、南方の新富町方面に移った。なお南町への移動は、札の辻南側の家が南町に面する18世紀初頭の頃と考える。かかる町の中心の移動は、いつもその時代の社会的経済的要請に応じたものである。

④頻繁に起きる大火事を防ぐために道路を拡幅したり、火除地を設けたり、林を作り、都市空間における部分的改造を行っている。これは、我々の祖先がその時々直面した問題に対して常に前向きに取り組んできた事を物語っている。

⑤幕末における大きな変化、例えば、人口の増加とか階層分化等はあまり見られず、町の崩壊は小さかったと考える。

⑥川越は城下町として周辺諸村の中心地であると同時に、江戸に対しては、江戸市民の生活物資を調達する市場町的役割をもっており、町の機能

に二重性が見られる。

(B)前橋との比較；①近世後期、同じ領主の支配下にありながら、近代以降の発展の歩みに違いを生じたのには、1つは、領主の在城か否かという点にあり、もう1つは、江戸との距離の違いからくる江戸との関わり方の違いである。つまり、川越は江戸に近い事から、江戸圏の中で江戸に密着した発展を遂げたが、前橋は、江戸との間に距離があったために、江戸と深く関連しながらも独自の経済圏をもつ事ができたのである。

②両町のあゆみの違いは、市民性にも端的に表れており、町のあゆみは無形の影響も及ぼすといえる。

(C)関東の城下町；①関東の城下町は、親藩・譜代が殆んどで、その数も多いが、個々の石高は少ない。

②惣構え型・郭内専士型の城下町が多く、早くから町場が発達していたものの、近世城下町への再編成は後れたと考えられる。また、中世から同じ場所に立地している城下町が多い。

③江戸への求心力によって存在していたが、江戸との有機的距離によって、その強弱が異なる。つまり、江戸近郊の城下町は、川越のような二重性を持っているが、ある程度の距離を保つ城下町では、江戸との関係が比較的弱く、独自の経済圏をも形成していたのである。この有機的距離は近代以降鉄道の開通によって大きく変化し、鉄道との関係が都市の発展に大きく影響した。また、常に求心力を必要とするのは、関東の都市の特色の一つで、その中心は、鎌倉・小田原・江戸と移ってはいるが、これは、現代でも、東京の卓越に通じるのではないかと考える。

東京における木材産業の立地とその変化

—新木場の事例—

奈良晴美

1. 目的

江東区新木場は世界的な木材産業の集積地であ

る。江戸時代からの歴史をもつ旧木場からの移転は昭和49年に始まった。木材業者の時代へのひとつの対応であった移転の意義を、移転後の業界の